

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24659985

研究課題名(和文)がん診療連携拠点病院における「がん患者サロン」普及促進のための研究

研究課題名(英文)A study on promotion of Saloon for cancer patients in the designated cancer hospitals

研究代表者

光行 多佳子(Mitsuyuki, Takako)

名古屋大学・医学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：10581332

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、全国のがん診療連携拠点病院を対象に質問紙調査を実施し、「がん患者サロン」の実施状況を調べ、効果的な運営を検討することである。主な結果：「がん患者サロン」は、月1回・2時間の開催が標準的で、1回の参加人数は4人から10人が多く、利用者同士の交流が行われ、身体症状や生活のこと、今後の不安について話題にされていた。病院職員スタッフは看護師やMSWが多く、8割のスタッフが利用者の変容を感じ、6割が進行役として専門的な役割や機能が必要と考えていた。5割の施設がサロンのための予算を確保し、3割の施設が運営委員会を設置していた。今後、「がん患者サロン」の実効性のあるモデル構築を目指す。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine effective management of "Saloon for cancer patients" in the designated cancer hospitals through investigating implementation of "Saloon for cancer patients" with questionnaire. The main results: The saloon opens once per month for two hours normally. 4-10 members participated in each saloon. They communicated with others about their physical symptoms, living and anxieties about the future. 80% of staffs felt that members have changed, 70% of them felt that members have been fairly satisfied, 60% of them needed specialized roles and abilities of facilitator. 50% of hospitals had secure budget for saloon, 30% of them had steering committee. We aim at building the effective model of "Saloon for cancer patients."

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん患者サロン がん診療連携拠点病院 がんサバイバー 緩和ケア

1. 研究開始当初の背景

がん対策基本法(2006年)に基づき策定されたがん対策推進基本計画(2007年)では、増加するがん患者に対して、総合的かつ計画的にがん医療の均てん化を推進する一方、がん患者の生活の質の維持向上を目指し、患者や家族への「心のケア(精神的支援)が行われる相談支援体制の構築」が明記された。その中で、「心の悩みや体験等を語り合う場」を提供する活動が促進されたことから、各地のがん診療連携拠点病院では、がん相談支援センターを運営する中で、患者と家族同士が交流する場「がん患者サロン」を設置するようになってきている。しかし、がん対策推進基本計画には交流の場を運営するための明確な指針が示されていないので、各施設は様々な研修や先駆的实践を行う施設を参考にすることで自施設の条件に合わせた「がん患者サロン」を展開している状況である。研究においても「がん患者サロン」に関する全国規模の研究はなく、各施設の実践報告等個別解に留まっている。そこで、全国のがん診療連携拠点病院を対象に「がん患者サロン」の実施状況を横断的に調べ、効果的な運営のための検討を行うことが必要と考えられた。

2. 研究の目的

本研究では、がん診療連携拠点病院の「がん患者サロン」実施例の中から、運営のための実施要件を導き出し(第1ステップ)、それらの項目について全国のがん診療連携拠点病院での実施状況を調査する(第2ステップ)。その結果から実効性のある「がん患者サロン」のモデルを構築して普及促進を目指す。

3. 研究の方法

(1)第1ステップ: 研究デザイン: 構造化面接法による質的研究 対象: 厚生労働省が指定する全国のがん診療連携拠点病院の中で、2012年5月の時点で学会発表や雑誌等に「がん患者サロン」の実践を報告している施設 調査方法: 2012年6月対象施設に研究参

加を依頼、2012年7月から9月に自作の調査票(調査項目: 病院概要、「がん患者サロン」の実施状況、利用者、病院職員スタッフ、ボランティア、運営、経緯、評価と課題)を用いた聞き取り調査 分析: Berelsonの内容分析(逐語録から1つの意味を含む文章を記録単位として記述し、記録単位からサブカテゴリー、カテゴリーを生成する)を行い、「がん患者サロン」の運営について概念図を作成。

(2)第2ステップ: 研究デザイン: 無記名自記式質問紙調査法による量的研究 対象: 厚生労働省が指定する全国のがん診療連携拠点病院 397施設(都道府県: 51施設、地域: 346施設)と都道府県知事指定のがん診療拠点病院(都道府県により名称が異なる部位指定やがん診療連携協力病院を含める)214施設の計611施設の「がん患者サロン」に関する病院職員スタッフ 調査方法: 2013年2月対象施設に研究参加を依頼、2012年3~5月に自作の無記名自記式質問紙を研究参加の同意を得た施設へ郵送 分析: SPSS Ver.22を使用し、一次集計後、各変数間の関連について解析。なお、本研究は名古屋大学大学院医学系研究科生命倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1)「がん患者サロン」の実施要件の検討: 「がん患者サロン」の実践を報告していたがん診療連携拠点病院は22施設で、研究参加の同意の得られた15施設を研究者が訪問し、聴取調査を実施し面接内容を分析した。「がん患者サロン」が円滑に進んでいる点を示す事柄を「がん患者サロンの実施要件」(成功要因)、課題などの問題点を示す事柄を「実施要件が満たされない状況」(阻害要因)とした。その結果、成功要因として11カテゴリーが生成され、運営基盤、活動状況、継続発展のための支援、活動成果の4領域に分類した。運営基盤について、3カテゴリー 参加・対応できる病院職員スタッフ 病院職員以外のスタッ

フ 安定した運営組織 が生成された。活動状況について、3カテゴリー 利用者に応じた開催状況 利用者ニーズに沿う活動

安定した利用者数 が生成された。継続発展のための支援について、3カテゴリー 病院職員の支援 と行政や「がん患者サロン」同士の 円滑な連携 、利用者の周知を高める

サロンの効果的な広報 が生成された。活動成果について、2カテゴリー 利用者にみられる変化 評価(満足) が生成された。そして、阻害要因は10カテゴリーが抽出された。

これら抽出されたカテゴリー間の関連性を研究チームで検討し、「がん患者サロン」の実施要件に関する概念図を作成した。その結果は、第37回日本死の臨床研究会年次大会学会で発表後、論文にまとめ日本死の臨床研究会誌63号に発表した。

(2)「がん患者サロン」の実施状況調査：まず、第1ステップの調査で導き出した概念図に基づき、無記名自記式質問紙を作成した。質問項目は、施設概要 「がん患者サロン」の開設経緯 利用者の背景 活動内容 利用者の反応 スタッフ 運営 広報活動等の8領域 36項目で構成した。次に、対象の611施設に研究協力を依頼し、302施設の返信があった。その中で研究協力の同意の得られた194施設に調査票を郵送して173施設より回答(回収率 89.1%)を得た。「がん患者サロン」を開設している施設は154(全対象施設の25.2%)で、その結果を分析した。以下、一次集計結果を報告する。

施設の概要：「がん患者サロン」を開設している154施設の内訳は、都道府県がん診療連携拠点病院が21施設、地域がん診療連携拠点病院が107施設、都道府県知事指定がん診療連携拠点病院が26施設だった。

「がん患者サロン」の概要：開設の経緯は、がん診療連携拠点病院の任務とする施設が124(80.5%)と多く、患者の要望や発案による施設は69(44.8%)、病院職員の発案による

施設は51(33.1%)、病院管理職員の発案による施設は9(5.8%)だった。継続年数は1~3年目の施設が90(58.4%)、4~8年目は57(37.0%)であった。開催時間は2時間の施設が75(48.7%)と多く、4~8時間開催している施設は19(12.3%)だった。開催頻度は、月に1回が81(52.6%)で最も多く、月に2回が24(15.6%)、週に1回は9(5.8%)施設だった。開催時間が7~8時間でかつ“集会している”施設は5(2.9%)であり、開催時間が7~8時間で“集会はしていない”施設は1(0.6%)だった。

利用者の背景：1回のサロン参加人数は平均9.6(±8.9)人で、7~10人のサロンが48(31.2%)、4~6人が49(31.8%)、17人以上が20(13.0%)、11~16人が19(12.3%)、3人以下が18(11.7%)の順だった。女性の参加が多いサロンが多く129(83.8%)、男性の参加が多いサロンは15施設(9.7%)だった。利用者の多い年齢層は“60~79才”が89(57.8%)と最も多く、“40~59才”35(22.7%)だった。“20~39才”が多い3(1.9%)施設のサロンは、多いがん種が“乳がん”だった。多いがん種は乳がん105(68.2%)、消化器がん72(46.8%)、呼吸器がん41(26.6%)の順だった。

活動内容：スタッフが把握している利用者の参加動機は、参加者同士の交流が146(94.8%)、相談や指導を受けるため72(46.8%)、セミナー・講座67(43.5%)だった。参加の経緯は、院内掲示板・チラシによるが98(63.6%)、口コミ等・紹介が63(40.9%)だった。活動内容は、利用者同士の交流が主で150(97.4%)、セミナー・講座を行う施設88(57.1%)もあった。相談や指導73(47.4%)、家族支援52(33.8%)、創作・音楽等の催し33(21.4%)、症状緩和支援29(18.8%)、ネット・書籍閲覧21(13.6%)の順だった。利用者同士の話題としては、生活のことが120(77.9%)や身体症状関連119(77.3%)が最も多く、今後の不安110(71.4%)、治療内容102

(66.2%)、医療者との関係 92(59.7%)、家族や友人のこと 77(50.0%)、医療情報 70(45.5%)、人生について 54(35.1%)、意思決定 48(31.2%)、仕事のこと 43(27.9%)、経済面 39(25.3%)の順であった。

利用者の反応：スタッフから見て利用者の変容していると感じている施設は 120(77.9%)、どちらとも言えない 23(14.9%)、感じない 3(1.9%)であった。また、どんな変容を感じるかは、活力が出る 82(53.2%)が多く、生きる勇気や希望が見つかる 55(35.7%)、役割を見いだす 32(20.8%)の順であった。スタッフから見て利用者が「がん患者サロン」にまあまあ満足していると捉えている施設は 111(72.1%)で、満足・不満足のうち 37(24.0%)、不満足と捉えている施設は 1(0.6%)だった。新規利用者が増加している施設は 53(34.4%)、不変 73(47.4%)、減少している施設は 12(7.8%)だった。

「がん患者サロン」に関わるスタッフ：病院職員スタッフは 1 回に平均 2.9(±1.9)人で、病院職員がいない施設が 7 施設(4.0%)あった。主な職種は看護師 104(67.5%)や MSW 88(57.1%)が多く、認定看護師 73(47.4%)や専門看護師 29(18.8%)の専門職もいた。事務職 39(25.3%)、医師 34(22.1%)、臨床心理士 29(18.8%)、薬剤師 19(12.3%)、管理栄養士 18(11.7%)、理学・作業療法士 10(6.4%)の順であった。サロンの進行役に求められる役割や機能では、雰囲気作り 119(77.3%)が最も多く、新規利用者が和める工夫をする 110(71.4%)、利用者が支援を求めている内容をキャッチする 105(68.2%)、利用者の話題の方向性を調整する 96(62.3%)、黒子的存在で見守る 80(51.9%)だった。病院職員スタッフが「がん患者サロン」に参加する時間を確保している施設は 113(73.4%)で、多職種からの専門的支援がある施設は 111(72.1%)だった。病院職員以外のスタッフには、がんサバイバーがいる施設 46(69.7%)、

家族や遺族 がいる施設は 17(25.3%)で、主に場の雰囲気作りや進行役をしていた。

「がん患者サロン」の運営：運営委員会がある施設 52(33.8%)、予算を確保している施設 83(53.9%)、サロンの目的を文章化している施設 24(80.5%)、利用者名簿がある施設 86(55.8%)、利用者の参加動機を把握している施設 65(42.2%)、利用者の背景を把握している施設 50(32.5%)、利用者の心配事や悩み事を把握している施設 45(29.2%)、利用者のニーズを調査している施設 73(47.4%)、サロンでは利用者のニーズに応える努力をしている施設 74 施設(48.1%)、サロンが病院職員に周知されている施設 84(54.5%)、病院職員の協力が有る施設 122(79.2%)、病院職員の協力は必要と考える施設 133(86.4%)だった。

広報の方法：院内掲示板が 52(98.2%)、ホームページ 129(83.8%)、院内外の研修会等 53(34.4%)、口コミ 49(31.8%)であった。院外で連携している施設 68(44.2%)だった。

この調査により、現在のがん診療連携拠点病院における「がん患者サロン」の実施状況を実施要件に沿って概ね把握することができたと考えられた。さらに、変数間の関連性を解析した結果から、実効性のある「がん患者サロン」のモデルについて考察し、第 19 回日本緩和医療学会学術集会に発表する予定である。その後の投稿論文を準備している。

(3)「がん患者サロン」の活動内容に関する検討：名古屋大学で主催しているキャンパス型緩和ケア・サロンの実践例に関する質的研究とイギリスの緩和ケアの視察により、「がん患者サロン」の活動内容に看護の専門性を活かした療養支援の構造について検討した。第 18 回日本緩和医療学会学術集会で発表し、Palliative Care Research 9 号に発表した。

(4)「がん患者サロン」の普及に向けた検討：成果発表の冊子を検討する会議を開催して、

その構成について議論したところ、今後がんの経験者(がんサバイバー)を支えるための活動をより幅広く紹介する本を出版し、本研究成果を組み込む方向となった。現在、出版に向け準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

藤本喜久恵、阿部まゆみ、光行多佳子、伊藤正道、安藤詳子、がん診療連携拠点病院15施設に対する聞き取り調査によるがん患者サロン実施要件の検討、日本死の臨床研究会誌、査読有、63、2014、118-123

光行多佳子、阿部まゆみ、安藤詳子、「キャンパス型緩和ケア・サロン」におけるがんサバイバーの体験、Palliative Care Research、査読有、9(1)、2014、308-313、<https://www.jspm.ne.jp>

〔学会発表〕(計6件)

伊藤正道、阿部まゆみ、光行多佳子、藤本喜久恵、伏屋絵梨、丸山良枝、安藤詳子、がん診療連携拠点病院における「がん患者サロン」全国調査に関する報告、第19回日本緩和医療学会学術集会(神戸市)、2014.6.21

光行多佳子、伊藤正道、阿部まゆみ、藤本喜久恵、安藤詳子、全国のがん診療連携拠点病院におけるがん患者サロンの実態 その1:活動状況、第37回日本死の臨床研究会年次大会(松江市)、2013.11.1

伊藤正道、光行多佳子、阿部まゆみ、藤本喜久恵、安藤詳子、全国のがん診療連携拠点病院におけるがん患者サロンの実態 その2:運営面、第37回日本死の臨床研究会年次大会(松江市)、2013.11.1

光行多佳子、阿部まゆみ、安藤詳子、伊藤正道、藤本喜久恵、「キャンパス型緩和ケア・サロン」におけるがんサバイバーの体験、第18回日本緩和医療学会学術集会(横浜市)、2013.6.21

阿部まゆみ、藤本喜久恵、光行多佳子、伊藤正道、安藤詳子、がん診療連携拠点病院15施設に対する「がん患者サロン」調査結果報告~その1~、第18回日本緩和医療学会学術集会(横浜市)、2013.6.21

藤本喜久恵、阿部まゆみ、光行多佳子、伊藤正道、安藤詳子、がん診療連携拠点病院15施設に対する「がん患者サロン」調査結果報告~その2~、第18回日本緩和医療学会学術集会(横浜市)、2013.6.21

〔図書〕(計1件)(出版準備中)

安藤詳子、阿部まゆみ編、光行多佳子他、青海社、がんサバイバーシップを支える緩和ケア・サロン、2014.12

6. 研究組織

(1)研究代表者

光行多佳子(MITSUYUKI, Takako)

名古屋大学・大学院医学系研究科・助教

研究者番号:10581332

(2)研究分担者

安藤詳子(ANDO, Shoko)

名古屋大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号:60212669

阿部まゆみ(ABE MAYUMI)

名古屋大学・大学院医学系研究科・特任准教授

研究者番号:80467323

大川明子(OKAWA, Akiko)

名古屋大学・大学院医学系研究科・准教授

研究者番号:20290546